連載企画

# OB・OGの職場探訪

## 特許庁 審査官補

# 奥隅 隆さん（2007年理工学部大学院卒）

### 研究に打ち込んだ学生時代「ロボットの目」テーマに修士論文

「新しい知識や技術に毎日触れ合うことができる今の仕事は、非常に楽しいですね」―。そう明るく答えくれたのは、特許庁に勤める奥隅隆さん。

中央大学大学院精密工学専攻を2007年に卒業し、難関といわれる国家公務員I種試験を突破したキャリア官僚である。大学院では画像処理を専門に、学生時代は研究に打ち込む毎日だったという。

修士論文のテーマは、『照明環境の変化にロバストな実時間色認識手法の開発』。

「タイトルが長いんですよ」と言うので、メモ帳に書いてもらったが、長いのもさることながら、何のことやら分からない。数学や物理といった概念を遠い昔に捨ててきてしまった記者には、言葉を聞いただけでは全く理解できない。

「つまりは、ロボットの目の研究です」と奥隅さん。続いて「人間の目は白い照明の部屋にある白い紙も黄色い照明の部屋にある白い紙もそれが同じ白い紙だと認識できる。でも、ロボットにはそれができないんです。黄色い照明の部屋にある白い紙を黄色い紙だと認識してしまう。そんなロボットの目をいかに人間の目に近づけるか。それを研究していました」と丁寧に解説してくれた。

奥隅さん

### 公務員講座がきっかけ 受験勉強は効率的に

なるほど。でも、ここでまたひとつ疑問が浮かんだ。それではなぜ奥隅さんは研究者としての道を選ばず、公務員という道を選んだのだろう。そもそも公務員を目指すきっかけは何だったのだろうか。

「きっかけは大学4年生のときに何気なく参加した公務員講座でした。いきなり国家公務員I種試験の問題を解かされたのです。そして、私たちでもキャリア官僚になれること、私たちのような人材が求められていることを切々と説かれました。それで、雲の上だと思っていた国家公務員という職業が急に身近に感じられるようになったのです」

それからは公務員試験合格に向け、さぞ過酷な受験勉強が待っていたことだろう、と思ったら、ちょっと違っていた。

「受験勉強だけに必死になるということはありませんでした。もちろん、勉強はしましたが、やはり研究が一番だと考えていました。公務員試験は合格さえできればそれでいいのだから、いかに効率的に勉強を進めるかということに重点をおいていました」という。

フロアからは首相官邸や国会議事堂がみえる

例えば、文系の科目は基本的なところだけを押さえて、得意な理系の科目で満点を取れるように勉強した。「公務員試験の勉強は要領が大切です」と指摘する。

国家公務員Ⅰ種試験では、筆記試験で広く、そして深い知識が要求されるが、筆記試験で高い点数を取れてもそれだけですぐに国家公務員になれるわけではない。「官庁訪問」と呼ばれる面接を突破しなければ各省庁に採用されないのだ。そこでは、勉強だけではなく、大学で何をしていたのかそのすべてが問われることになる。

## 官庁面接の前日までドイツに 1日1件のペースで審査

ただ、この点について奥隅さんは全く心配はしていなかったという。「官庁訪問」の前日まで、ドイツにいたというのだから余裕だ。

「各チームがＡＩＢＯというロボットをプログラミングして競わせるロボカップの世界大会に参加するためでした。これは私たちの研究の集大成でもありました。結果を残すことはできませんでしたが、この経験は私の中に自信という大きなものを残してくれました。官庁訪問で『大学時代、何をしていましたか。』と聞かれても、『研究です』と胸を張って言えたからです」

こうして、奥隅さんは夢を実現した。現在は、特許庁特許審査第二部自動制御という部署に席を置く。整然としている大きなデスクの上には、これまた大きなディスプレイを2つも備えたパソコンが置いてある。

「毎日、特許出願された発明について、過去に同じような特許出願がなされていないかをチェックしたり、その発明に使われている技術を分析し、他の技術の単なる応用ではないかを審査したりしています。今はおおむね1日1件のペースで審査

しています」

## カーナビと電気自動車を担当 国民に奉仕できる唯一の仕事

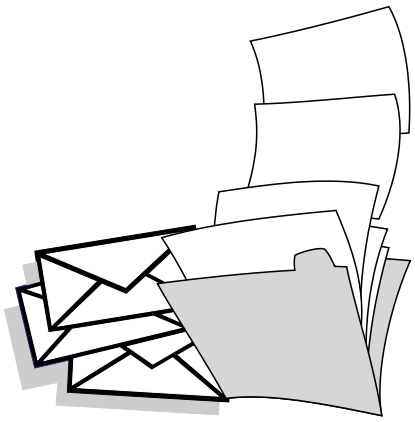
主にカーナビゲーションと電気自動車の審査を担当。「カーナビゲーションひとつとっても、経路探索の新技術やアイディア的な発明までさまざまな特許が申請されています」というから審査は後を絶たない。「場合によっては、審査まで2年待ち」ということもあるとか。

審査が遅いのではないかという批判を受けて、審査を早くするための政策を打ち出したり、5年間で約500人の任期付審査官を採用し、約1700人に審査官の数を増やしたりしているという。

昨年は海外での日本製品の模倣品の横行、日本国内でも人気饅頭の意匠権などが取沙汰された。グローバル化が進み、ヒト・モノ・カネの移動が盛んになっている今日、特許庁のあり方が問われていると思うがと、思い切って尋ねてみた。

「確かにそうした問題は、産業発展を特許制度の面から支えていく特許庁として、今後慎重に検討しなければならないことだと思います。日本の技術貿易は黒字であり、知的財産制度の活用は諸外国よりも進んでいます。この分野に関しては、日本の特許庁が世界をリードしていく立場にならなければと考えています」

仕事場での奥隅さん

最後に国家公務員を目指す学生へのメッセージをお願いすると、「国家公務員という仕事は、国民のために奉仕ができる唯一の仕事。そして、国家公務員になれば、スケールの大きな仕事ができます」との答え。奥隅さんら先輩たちの後を追って、中大出身の国家公務員が今後ますます増えることが期待される。

（学生記者　恒川賢史＝法学部3年）